
ツッパリ姫は今日も行く！

雨永祭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツッパリ姫は今日も行く！

【Zコード】

Z5049C

【作者名】

雨永祭

【あらすじ】

世界が一つの国となつた平和な世界。以下の問題は『暴走族』なのでした。そう、色々な意味で『暴走族』が問題なのでした。

(前書き)

短編第二弾です！
お楽しみ下さい！

皆様、おはようございます。

第一王女付きの執事の菜夏ライカと申します。

おはようございますとは言つてもお天道様はすっかり天頂に昇つてあります。つまりは、昼時なのです。

私を含めた家来一同は主たる皆様の食事が終わらなければ食事が出来ない事になつています。まったくもつて忌々しい習わしです。とは言つても、主の家庭の方針で食事は皆で食べる事となつてるので、主の皆様もお腹を空かせていらっしゃいます。
これも全て第一王女たる緋瀨あかせ・レイフオード・誓里セイリ様のせいなのです。

どうも最近、夕食後に歩いているのです。夜の秘密の外出は前からあつたのですが、恐ろしい事に最近は朝帰りしているのです。まったく忌々しい！ 何かあつたらどうするつもりなのでしょうか？

セイリ様の部屋の前に着き、扉をノック。

「セイリ様、ライカです。もう昼ですよ、起きて下さー！」

「……」

返事は無し。

やはり起きてませんか……。

「セイリ様、入りますよ！」

入るとそこにはセイリ様が天蓋付きのベットでそれはそれはだらしない格好で寝ていました。

掛布団は蹴飛ばされ床に、足はガニ股で、ネグリジェは捲れてパンツもお腹も丸見え、さらにお腹をボリボリ搔きながら涎を垂らして、大きなびきもかいて、美しい黒髪はボサボサで、その下に金色の何かが見えてました。

セイリ様のパンツが見えてますが私にはまったく関係ありません。

私はセイリ様の肩を掴んで激しく揺さぶります。

「セイリ様、起きて下さい！ もう昼食の時間なんですよ、誰もが困ってるんですよー！」

「ん……オメエ、ら……覚悟はいい、か……」

まったく起きる気配の無いセイリ様。しかも、なんて汚い寝言なのでしょうか。これ以上穩便に起こそうとしてもきっと同じ結果となることでしょう。伊達に長いことセイリ様の執事はやつていないです。だから、ちょっと力技を使う事にします。

持っていたハンカチを部屋の水道で濡らします。そして、そのベチョベチョハンカチを死者にやるよにセイリ様のお顔にそっと乗せます。

すると

「…………ふごんぐつ！ ～～～～～つ！…？」

突如としてバタバタともがき始めるセイリ様。それはそれは滑稽で、大爆笑したいのですがそれを堪えて笑うのは心の中だけにします。

セイリ様は悪戦苦闘の末に、ようやく濡れハンカチを顔から退けて息を荒げて呆然としています。

「はあ、はあ、はあ、はあ、か、川辺で死んだ祖母さんに鼻で笑われた……」

どうやらかなりギリギリだつたようです。

「セイリ様、目が覚めましたか？」

私の言葉にセイリ様はハツとして私の顔と手に持った濡れハンカチを交互に見比べ、黙つていれば相当可愛いその顔を般若の様に歪めて私を睨みます。

その顔は確かに恐ろしいですが、『慣れ』の前には成す術は無いのでした。

私はセイリ様が文句を言おうと口を開くのを正論を持つてして妨害しました。

「ライカ！ おま」

「セイリ様、自業自得です。貴方が来なければカイト様達は昼食を

始めませんし、それはつまり、私達家来がいつまで経つても昼食にありつけないということになるのです。

ましてや、最近はいつもこいつではないですか。皆様、イライラしてこますからその内私達家来がストライキを起こしかねませんよ」

息継ぎ無しに一気喋るとセイリ様は辟易して黙ります。

とまあ、ここまでは昨日もまったく同じ様な状況なので、今日は変化を付ける事にしました。

「ですから今日はより早く昼食にありつきたいので、お着替えの手伝いをさせていただきます」

「なつ！？」

それから私はセイリ様に有無を言わせず速やかに服を用意します。姫の服と言つても中世ヨーロッパの様にコルセットを着けて豪奢なドレスを着るとか、江戸時代の様に大仰な打掛けうちかけではありません。普通の とは言つても超高級品ですが 服です。

ちなみに今日のチヨイスはチューブトップのワンピースにレース付きのスパッツです。

私はそれらを持ちながらセイリ様ににじり寄ります。

「ら、ライカ、それはセクハラだ！ そんなことしたら、おい、聞いてるのかつ！？ おい、ライ つきやあ―――つ！」

その後、セイリ様は心底疲れた表情で昼食を召し上りました。

念の為言つて置きますが、私は自らが常識人であると自負しておりますので本当にセイリ様を着替えさせたなんて事は一切ありませんよ？

さて、今の時間は七時。私はセイリ様の部屋の屋根裏にいます。あ、忍者でも変態でもなく執事なので悪しからず。

昼食後に姉君と喧嘩し、母君に追われ、妹君に萌えられた拳句、父君と弟君にたしなめられた末、ようやく夕食を終えられたセイリ様はクローゼットの奥からロープと何かが入った紙袋を取り出して窓を開けます。

それからロープをベットの天蓋を支える柱と自分に結び付けて窓から出て行きました。もちろん紙袋も忘れずに。

以前までは本屋辺りにしか行つていませんでしたが、今はそうは思えません。はて、さて、一体何をしているのやら。

私はセイリ様を追う為に、ロープも何も使わずに窓から飛び下ります。セイリ様の部屋は三階にあるのですが、執事たる私にとっては問題はないのです。

なぜなら執事たるもの、主の為なら煮えたぎる「ホールタール」のプールを泳いで渡り、上空一千メートルから落ちても無傷で帰還し、素手で空腹のグリズリーに勝利出来るという気構えでなければならないのだから。三階程度の高さで怖がってはいけないです。

軽々と着地した私はセイリ様を追う為に駆け出しました。

ここは国王のお膝元で國で一番栄えている場所である『新東京特別区域・第三地区』。昔の呼び名から『シブヤ』と呼ばれています。当然、人は多いのですがセイリ様は瀬みない足取りで進んで行きます。

しばらく進むとセイリ様は公共トイレに入つて行きました。物陰に隠れ様子を伺いながら待つていると少ししてセイリ様が出て來た。

出て来て、度肝を抜かれました。今まで十九年間生きてきて初めての衝撃でした。

黒く美しい筈の髪が金色に煌めき、メイクも控え目ながらバッヂ決め、黒いコートを纏ついていたのです。

セイリ様の身に何が？ も、もしや男？

もし、私の予想の通り男だつたら、朝帰りの理由は……。

久々にぶちキレました。もし私がセイリ様を誑かす忌々しい男と出会つてしまつたら、私は坂道を転がる石のじとくやる所までやつてしまふでしょう。

私は溢れ出る殺意を胸の内に秘めながらすっかり変容してしまつたセイリ様の尾行を再開しました。

セイリ様は少し進んだ所にある森林公園に入つて行きます。

も、もしやここで逢引！？

急いで私も森林公園へ入ります。

森林公園に入つてからは木の上を飛び移る様にセイリ様を追います。

すぐに広場が見えてきました。遠目からは紅い光が大量に浮かんでいるように見えます。

セイリ様が広場に出るとそこには

「……バ、バイク？」

広場にあつたのは五、六十台はあるバイクの群れでした。

てつきり男が待つてゐると思つていた私は驚き、拍子抜けして、胸の内に秘めた殺意が霧散してしまいました。

しかし、あのバイク集団はもしかして、暴走族なのでは？ バイクに乗つてゐるのはマスクしたり木刀持つたりといかにもな格好の男女でした。まさに暴走族。

セイリ様はあらうことかそんな社会の秩序を乱す迷惑極まりない輩達の中を堂々と進みだしたのです。

「つ！？ セイ！」

思わず出た叫びは、『「ご苦労様ですっ、総長！……』』という広場の暴走族達の”挨拶”によつてかき消されました。

再び啞然となる私。アイツらが挨拶したのはもしかして、もしかしなくともセイリ様ではないのだろうか？ あれ？ ということはセイリ様が総長？

そうこうしている内にセイリ様は暴走族達のバイク群の中に立ち、コートを翻したのです。

「お前らあつ！ 欠席してゐる奴あは居ねえだろうなあつ！」

『オオオオオオオツ！…』

セイリ様の口汚ない言葉が私の耳を貫きました。

……何を、

「バイクの整備を怠つた奴あ居ねえだろうなあつ！」

『オオオオオオオツ！…』

私の中で尋常じやない程の怒りが堪忍袋の緒をキリキリと千切れろとばかりに引っ張ります。

一体何を、

「今日もやるぜえつ！…！」

『オオオオオオオツ！…』

ブチンッと緒が切れました。

私は木から飛び下りて暴走族達の群れに向かいます。

セイリ様は四度暴走族達に呼び掛けます。

「行くぞっ！ や」

もう我慢なんてしません。思つ存分やらせてもらいます。
一体何をやつてるんです、

「セ～イ～リイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！」

私の怒声に暴走族達はギョシと振り向き、セイリ様は顔を真つ青
にします。

静かにバイク群に歩み寄る私にそこからケバい少年が出てきました。

「おいテメエッ！ 何総長呼び捨べあつ……」

この愚か者が言い終わらぬ内に間合いを詰めて腹に捩じりの力と
氣を込めた掌底を叩き込み、少年はバイクや人を巻き込んで十メー
トル程吹っ飛びました。

セイリ様はなぜ私がここにいるの？ といつ表情で私を見つめて
います。その間に仲間がやられて黙つてられなかつた暴走族達が無
謀にも私に襲いかかってきたのです。

クツクツクツ、まつたく持つて忌々しい。今や私の怒りは最高潮、
クライマックスなんですよ！

一足飛びで暴走族達との間合いを詰め、その勢いのまま後ろ回し
蹴り、着地、そのまま回転の勢いを利用して左の掌底を突き出す。
私を囮む様にして鉄パイプや木刀、角材を振り下ろすも素早くそ
いつらの内の一人から鉄パイプを奪い、一閃。

トドメにバイクを掌底で吹き飛ばしてストライク。

「……ら、ライカ」

愕然とした顔のセイリ様。無理も無いでしょう、百一十は下らない
数の忌々しい配下たる者達を僅か十分かそこらでのしたのです。
まあ、私は執事なのでこれくらい出来て当然なのですが。

それはさておき、私は笑みを浮かべながらセイリ様に歩み寄ります。セイリ様は泣きそうですがそんなことを知ったこっちゃありません。自業自得なのです。

「セイリ様、これはどういう事なのですか？」

「そ、それは……」

言い淀むセイリ様。

ああ、私、セイリ様をここまで惡々しくも愛しいと感じたのは初めてですよ。

「断りも無しに夜間外出をし、それだけならまだしも朝帰り、髪の脱色と染色、口汚い言葉を吐きまくり、あまつさえ、暴走族の頭？ふざけるのも大概にしないとシバキ倒しますよ？」

大体今、国でどんな事が行われているか知ってるでしょう？『暴走族撲滅運動』ですよ？なのに、第一王女たる貴方が暴走族の頭？それがバレたらどうするつもりですか、警察に捕まつたらどうするつもりですか？貴方の父君は親バカでいらっしゃるから事実を握り潰しかねませんよ？

セイリ様、貴方は父君にそんな腐った事をさせたいのですか？それが取り返しの付かない事態にならないなんて保証はどこにも無いんですよ？

分かったのなら総長になつた動機と暴走族の活動内容を要点をまとめて分かりやすく説明して下さい！！

息が続かないつてくらい一気に捲し立てる私にセイリ様は少しばかりオロオロしてからようやく口を開きました。

「ラ、ライカ。お、怒らないで聞けよ？」

オレが総長になつたのは一週間前、いつものように本屋とゲーセンを梯子してたんだよ。

その途中で、この暴走族の前総長とその幹部が道路横断中のオレにバイクで突つ込んで来て、咄嗟にそいつらを返り討ちにしたんだ。そしたら、アイツらにこここの広場まで拉致られたら総長になつて下さいって頼まれてさ、暴走族とかバイクとかそーゆーの興味あつたし、盗んだバイクで走り出すくらいの事してみたかったからや、二つ返事で了承した。

あ、この髪はその時ついでに染めたんだ

その時、すつ頗狂な声が聞こえたのでした。

「な、なんだ「リヤアツ！？」

そこには人懐っこい顔にツンツンの髪に赤と黄色のメッシュを入
れた男がいました。

「あ、トウヤ」

セイリ様は少し安心した表情を見せたのです。
何となく、気に入りません。

「セイリ様、の方方は誰ですか？」

「えーっと、そう、アレだよ！ オレの部下！」

なんだか言い淀んでいましたがまあ、いいでしょ。後で問い合わせばいい事です。トウヤとやらは倒れた暴走族の連中を介抱しています。この間に残りの質問の答えを聞くことにします。

「それでセイリ様、どんな活動をしているのですか？」

「えつとな、まずバイクで走り回りながらゴミを拾つてオレ達の繩張り荒らしどかオヤジ狩りとかそーゆーのを取り締まってるんだよふうむ、つまりは町の清掃と無法者の駆除ですか。でも、アレですね。黙つて見過ごす事は出来ませんね。

セイリ様にそうゆう事は止めるよう言おうとした時、

「セイリ！ いたのかよ！」

トウヤがセイリ様に駆け寄つてきたのです。

それにしても呼び捨てとは一体どうこいつア見なのでしょうか？

「トウヤ！」

セイリ様は私から逃げるよつて、また大変嬉しそうにトウヤに駆け寄つたのです。

何なのでしょうか、この心の底より湧き上がるどす黒い感情は。

「なあ、セイリ、この有様は何なんだよ？」

「ワリイ、あそこにいるオレの知り合ひがキレちまつてさ。そしたらこの有様に……」

「はあ？ も、もしかしてあそこの美人さんが一人で？」

「ああ、一人で。ついでにあの男だよ」

「ま、マジかよ……」

何なんでしょうかね？あの一人だけの世界は。まるで私がいかのような雰囲気ではありませんか。忌々しい、なんて忌々しいのでしょうかー。

私は一人に近付き、トウヤに話し掛けます。

「君、トウヤと言いましたね？」

「え？ あ、ああ、トウヤだけど……」

セイリ様が顔を強張らせてトウヤに話し掛けよつとするのを田で制し、トウヤに尋ねます。

「君はセイリ様とどんな関係なのでしょうか？」

セイリ様のお顔は真っ青で、田で何かをトウヤに訴えかけよつとしていますが、トウヤは氣付いた様子も無く答えてくれました。

「前代の総長で、」

ほう、前代の総長ですか。つまりはセイリ様を轢きかけた男ですか。

「セイリの彼氏だ」

頭が、真っ白になりました。

「この男は今何と？」

こんな男がセイリ様の彼氏だと？ そんな馬鹿な、きっと私の聞き違いでしよう。そうです、そうに決まっています。セイリ様のお顔は土氣色になつてしまっています。私は再びトウヤに尋ねました。

「すいません、よく聞こえなかつたのでもう一度言つてもらひますか？」

「だから、前代の総長で、セイリの彼氏だ。ってか、あんたこそセイリの何なんだ？ 様とか付けちゃつてさ」

トウヤの言葉を無視してセイリ様を見据えます。

「セイリ様、どういう事ですか？」

「は、ハハハ……」「ごめん……ね？」

本日一度目のブチソッという音が脳内に響く。

「貴様アアアアアアアアアアアツ！」

「ぎやああああつ！ なんだアンタいきなりー！」

「うわあっ！ やめろライカあつ！」

トウヤの胸倉を掴んで激しく揺する私とそれを止めようとするセイリ様。なぜ私を止めるのですか！

「セイリ様！ この男は貴方を誑かしたのですよ！ ここに一つを抹殺しなければ私の気がすみません！！」

「うわあっ！ セイリツ！ この人俺の事抹殺するとか言ってんだけどーーっ！！」

セイリ様を呼び捨てにしないで下さいクソ下郎！

トウヤをボツコボツコにしようとして、

「やめろライカ！ オレとトウヤは両想いなんだ！ これ以上トウヤに何かしたらお前とは一生口聞かないからな！！ バカラライカ！！」

雷に打たれたような衝撃が走りました。

もう、立ち直れないかもせん……。

私はトウヤから手を離し、力無く膝をつけました。

ああ、もうセイリ様は私なんかいらないのでしょうか？ もう、私の手を離れてしまったのでしょうか？

幼少の頃より見守つて来たセイリ様は、いつの間にか大人になってしまったのでしょうか？

……いいえ、そんなことは無い筈です！ 私は何ですか？ そう、私はセイリ様の執事！ 執事の仕事は主に使え、導き、守護すること！ なればこそ、このまま放置してはいけないのです！

「お、おい、大丈夫か？」

「ラ、ライカ？」

私は伊達にセイリ様を幼少より見守つて来てはいません。無理矢理やめさせたりしても納得いかないし、反発することでしょう。きっと家出します。

ならば、やる事は一つ！

私は立ち上がり、セイリ様を見据えます。

「セイリ様っ！」

「は、はいっ！」

私の剣幕に思わず強張るセイリ様の顔。

「私も暴走族に入ります！」

セイリ様とトウヤが顔を見合わせ、私を見て、それからもう一度顔を見合わせると、

「「エエッ！…？」

驚き叫びました。

「何を驚くのですか。私は執事、セイリ様の執事なのです！執事の仕事は主に使え、導き、守護することなのです！ならば、私がセイリ様の暴走族に入るのは当然でしょう！？」

間抜けなお顔で私を見つめるセイリ様。私の話を聞いているのでしょうか？

「セイリ様っ、入って良いのですかっ、ダメなのですかっ、どっちなんですかっ！？」

セイリ様は私の勢いに押されてコクコク頷きました。

「ありがとうございます、セイリ様。それでは私はそこ辺りで伸びてる者達を介抱してまいりますので」

私はそれだけ言って伸びてる者達の元に行こうとしたのですが、私が向こうを向いた瞬間にセイリ様の安堵の溜め息がきこえたのです。チラリと見るとトウヤと手を繋いでるではありませんか！湧き上がるどす黒い感情を乗せて私はセイリ様に告げました。

「セイリ様、私が暴走族に入ったからと言つて説教が無くなつた訳ではありませんよ？浮かれるのも良いですけど、覚悟して置いて下さいね？ええ、それはもう、私の気の済むまでやらせてもらいますから」

セイリ様のお顔が恐怖に引きつりました。

フフフ、自業自得なのですよ、セイリ様。

私は伸びてる者達の元へと歩き出します。

「い、イヤだああああああああああああーーっ！…」

セイリ様の悲鳴がいつまでも、いつまで夜の町に響き続けたので

し
た。

(後書き)

いかがでしたか?
楽しんでいただけたのなら幸いです。
評価・批評・感想をよろしくお願いします!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5049c/>

ツッパリ姫は今日も行く！

2010年10月8日15時33分発行